

バングラデシュ・ロヒンギャ難民キャンプにおける天井の Shamiana 化

—再編される包摂の天蓋—

37246101 中村 莉緒

0. 序

0.1 研究の背景と目的

難民キャンプにおける住環境は、物理的・社会的制約の中で最低限の機能性を追求する場として語られることが多い。その一方で、本研究で取り扱うバングラデシュのロヒンギャ難民キャンプでは、天井に多色の布をあてがう行為が見られ、建築に最低限の実用性を超えた役割を与えようとする意識の表れに思われる。ベンガル人建築家から、このような天井布は一般的に Shamiana (シャミアナ) と呼ばれ南アジアの天蓋文化の一種であるという証言を得たことが、本研究の出発点である。

ではなぜ、ロヒンギャ難民は天井に Shamiana を付けるのだろうか。これまでの研究では、Shamiana とロヒンギャの関係性については十分に論じられてこなかった。本研究は身分・宗教・民族を超えて使用されるベンガル地方の地域文化である点や、難民が自ら行う空間的営みの背景を明らかにすることにより、ロヒンギャ難民キャンプで起こっている天井の Shamiana 化がどのような現象と言えるのかを考察する。それをとおして民族で事象を切り分ける視点や、難民＝受動的存在という固定観念に再考を促す。

0.2 研究の対象と方法

本研究では、ティムール朝時代 (1370-1507) から現代にかけての Shamiana の歴史的展開と、バングラデシュのロヒンギャ難民キャンプおよびその周辺地域においてみられる、Shamiana を通じた建築的実践を研究対象とする。歴史資料、図画、旅行記等の文献資料の分析と、バングラデシュの複数の地域ならびにコックスバザールのロヒンギャ難民キャンプで実測調査や聞き取り調査、建築環境調査などの現地調査を行う。

0.3 用語の定義

「Shamiana」: 本研究において Shamiana とは、南アジアで広く用いられる布製の屋外用仮設天蓋・日除けあるいは室内で使用されている天井布を指す。「ロヒンギャ」: ミャンマー西部ラカイン州 (旧アラカン州) に歴史的に居住してきたイスラム系少数民族を指す。「ベンガル人」: ベンガル地方 (バングラデシュおよびインドの西ベンガル・ビハール州) を中心に住むインド・アーリア人に属する民族を指す。言語はベンガル語を話す。

0.4 既往研究と本研究の位置づけ

Akhter (2018) は、Shamiana の歴史的背景に触れているが、その対象はムガル宮廷内の仮設建築に限定されており、その後の庶民への浸透や、現代の用法に至る社会・空間的変容にはほとんど言及していない。Rachan (2018) は、ロヒンギャ難民キャンプにおける住宅の構造、材料、間取りのバリエーションについて現地調査に基づいて記述しているが、天井布についての記述はない。また Khan and Rana (2023) では、ロヒンギャの子供たちの経験談を通して、Shamiana という多色の天井布がミャンマーでも使用されていたことが紹介されているが、建築的にどのように設

置され、どのような意味を持つのかといった具体的な分析は行われていない。

0.5 論文の構成

本研究は、序章、第1章から第4章、終章からなる。第1章は、ロヒンギャについての背景知識を共有したのち、研究を始めるきっかけとなった Shamiana の発見をまとめたフィールドノートの章である。第2章では、「Shamiana とは何か」という問いを設定し、現代的用法と歴史的展開を探ることで、Shamiana の正体を明らかにする。第3章では、ロヒンギャ難民キャンプにおいて実際に用いられている天井布に着目し、ロヒンギャ自身の語りと生活実践を通して、なぜ天井に布を張るのかを明らかにする。第4章では、視点をロヒンギャ難民キャンプの外部へと広げ、キャンプ周辺のコミュニティやバングラデシュ国内の複数地域における調査結果をもとに、ロヒンギャの天井概念である Chopper が Shamiana 的な形態へと再編成される過程を明らかにする。終章では、各章で得られた知見を総括し、ロヒンギャ難民キャンプで起こっている「天井の Shamiana 化」がどのような現象であるのかを改めて位置づけるとともに、本研究の学術的意義と今後の展望について述べる。

1. ロヒンギャの現状とリサーチクエストの芽生え

1.1 ロヒンギャとは何者か

本研究における「ロヒンギャ」とは、ミャンマー西部のラカイン州を主たる故郷とするイスラム系少数民族を指す。彼らは仏教徒が多数を占めるミャンマー政府によって国民の枠組みから排除され、数々の弾圧を受けてきた。2017年8月、ミャンマー国軍によるロヒンギャ大虐殺を契機として、大量のロヒンギャ難民が隣国のバングラデシュに流出する事態が発生し、100万人を超える人々を収容する巨大な難民キャンプ群が形成されるに至った。

1.2 ロヒンギャ迫害の歴史

ロヒンギャが今日「故郷」とみなすラカイン州一帯は、かつてアラカン王国として知られる。15～18世紀にかけて海上交易の中継地として栄え、王は仏教徒であったが、ムスリムの高官を登用するなどして仏教徒とムスリムが共存していたことが指摘されている。その後、王朝の消滅とイギリスによる植民地化を経て、旧アラカン王国の避難民の帰還とイスラム系移民労働者たちの流入により、ラカイン州の人口構造が変化したことで、仏教徒とムスリム双方の亀裂が深まっていった。

1948年にビルマ (現ミャンマー) が独立すると、新政府は国民国家の枠組みを定めるうえで民族分類と国籍制度の整備を急いだ。1962年の軍事クーデター以降、軍政は国家の統一を名目に国籍制度を厳格化していき、1982年には国籍法によって土着民族以外を排除する仕組みを確立した。同法で土着民族として認められなかったロヒンギャの人々は国籍を取得できず、日常生活のあらゆる場面での制限やミャンマー国民からの差別に苦しむことになる。

こうした法制度上の排除は、時に軍事作戦や民間人同士の暴動の形で露骨な暴力として噴出し、そのたびに大量の難民流出を生んできた。

1.3 館林調査

本研究の天井布との出会いは、日本国内で暮らすロヒンギャの人々への調査を通してであった。筆者が調査を行った群馬県館林市は、日本有数のロヒンギャコミュニティが形成されている地域であり、300人ほどのロヒンギャが暮らしている。一部のロヒンギャのみ、日本政府から難民認定されているが、大多数は特別在留許可のもと生活している。筆者はロヒンギャ男性の Aung Tin 氏および館林市国際交流協会の柴田氏にお話を伺い、お二人がバングラデシュのロヒンギャ難民キャンプを訪れた際に撮影した写真を入手した。後に筆者の関心を引いたのが、キャンプ内の住宅やモスク、学校に共通して見られる天井布の存在である。機能性や経済性のみが追求されると思っていた難民キャンプの仮設建築で、きわめて装飾的な天井布が張られている様に違和感と興味を覚えた。



図1 左からロヒンギャ難民キャンプの住宅、モスク、学校

1.4 天井布の正体

館林調査で浮上した天井布の正体を探るため、バングラデシュでロヒンギャ難民キャンプの建築プロジェクトに携わる建築家への聞き取り調査を行った。対象はキャンプでコミュニティセンターを設計した、ベンガル人建築家の Rizvi Hassan 氏であり、図1の天井布の写真を示すと、彼は迷いなく Shamiana と呼び、とても伝統的なものだと言明した。また、彼の語りでは室温調節のために布を設置しており、汚れを目立ちにくくするために多色の布を選んでいるという機能的側面が強調された。

1.5 小結

Hassan 氏へのインタビューから、難民キャンプの建築内部に見られる天井布の名称が Shamiana であることや、役割、入手方法などが明らかになった。次章ではまず Shamiana とは何かを明らかにすることを目的とし、その定義と現代的用法、および歴史的展開を整理する。

2. Shamiana とは何か—15世紀から現代まで

2.1 用語の定義

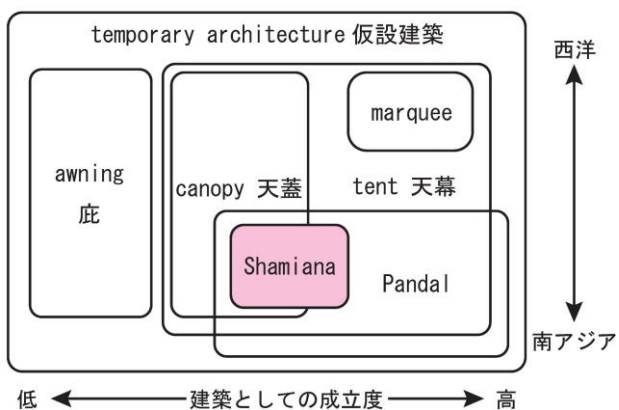


図2 各用語の位置づけ

本節では、本研究で扱う Shamiana という語と類義語の整理を行う。各用語の位置づけを図2に示す。

2.2 南アジアにおける現代的使用と建築家による再解釈

Shamiana の定義と館林調査を通して、Shamiana の現代的用法は大きく分けて2種類あることが分かった。一つ目は屋外用仮設天蓋（布が天井兼屋根として機能）で、二つ目は室内用天井布（屋根材と布がそれぞれ独立）である。用語の定義からは現代のインドおよびバングラデシュにおいて、Shamiana は婚礼や宗教祭礼などの非日常的な場面で屋外用仮設天蓋として広く用いられていることが分かった。これに加え、館林調査で得た写真データからは室内用天井布として難民キャンプ内の住宅・モスク・学校などの半恒久的建築の中で日常的に用いられていることが分かる。

2.3 語源とそこからたどる起源

管見の限り、Shamiana の英語文献における初出は 1609 年の東インド会社宛書簡であり、W. Foster 編 (1896) の書簡集に収録されている。また、言語学的に Shamiana はペルシア語の شامیانه (šāmiyāne) を語源としているため、ペルシア語文献における最古の事例の検証を行った。ここでは、かなり初期の事例として 1487 年ごろに成立したティムール朝期の文献 Tadhkirat al-Shu'ara' があげられる。

2.4 中央アジアから南アジアへ

文献記録からは、Shamiana がペルシア語由来であり、中央アジアのティムール朝には少なくとも 1487 年時点で存在していたと考えられ、その後ムガル帝国初代皇帝バーブルによってインド亜大陸にもたらされた可能性が高い。バーブルはティムールの 5 代孫であり、1483 年に中央アジアで領主の子として生まれ、1526 年インドに侵攻してムガル帝国を建国した。Akhter (2018) は、「ティムールの子孫たちは、テントと Shamiana で飾られた景観設計にチャールバークの概念を導入し、平時と戦時の双方でこれらを活用した」と指摘しており、ティムール朝に由来する Shamiana 文化が、バーブルの移動とともに宮廷文化と軍事活動を主要な媒介として中央アジアからインド亜大陸へと持ち込まれたと推測できる。

2.5 権力者のための Shamiana

本節では、宮廷・軍事活動の文脈において Shamiana がどのように用いられ、権力の可視化や儀礼空間の演出にどのような役割を果たしたのかを検討する。Khan (2016) は、王の野営地で用いられる天蓋が玉座を中心化し人々に秩序を与える役割を担っていたことを指摘している。この点において、Shamiana は、ティムール朝からムガル帝国に至る宮廷文化において、単なる日除けや仮設構造物としての用途にとどまらず、権力を可視化するための役割も担っていたと考えられる。



図3 ジャハーンギールがクルラム王子にターバン飾りを贈呈する様子

これは、ムガル宮廷によって製作された細密画において視覚的に確認できる。移動を前提とする王権¹にとって、天幕は野営地における可動式の宮殿となり、皇帝のために設置された天蓋は、玉座を中心化し階層を明確化することで、周囲の人々や儀礼行為に秩序を与える役割を担っていたのだろう。

2.6 小結

本章では、用語の定義と現代的な用法から、Shamiana が南アジアで広く用いられる屋外用仮設天蓋あるいは室内用天井布であるという位置づけを明確にした。また、歴史的な展開をたどることでミャンマー側からではなく、むしろ反対の中央アジア側から伝播した文化であること、そしてかつては権力の象徴として用いられていた天蓋が今では庶民の婚礼や難民キャンプの建築にまで普及していることを明らかにした。特に、移動の方向という点に注目すると、西から来た Shamiana 文化と東から来たロヒンギャが難民キャンプでぶつかるという構造が発見できることが興味深い。では、こうした中央アジアから南アジアへと伝播したとみられる Shamiana が、なぜロヒンギャ難民キャンプで使用されているのか。第3章では現地調査から得られたロヒンギャの語りに焦点を当て、その真相を明らかにする。

3. ロヒンギャ難民キャンプの天井布

3.1 ロヒンギャ調査概要

本論文のロヒンギャの調査地は以下の3つに分類できる。

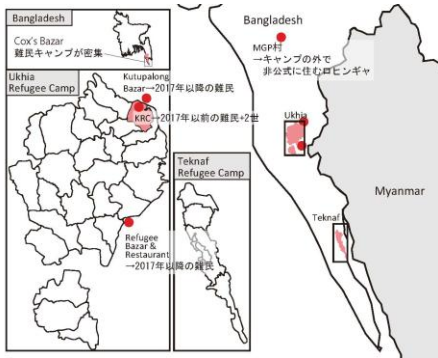


図4 ロヒンギャ調査地

① KRC (Kutupalong Registered Camp) : 1991年から存在する最も古いキャンプであるため、長く居住している高齢者や、彼らの子供世代でキャンプ生まれの2世たち

を対象に調査を行った。

② キャンプ周辺の市場や飲食店 : 主に2017年以降に移住し、ミャンマーの暮らしを知っている新しい難民たちを対象として聞き取りを行った。

③ MGP村 : キャンプの外で非公式に住むロヒンギャを対象に調査を行った。

3.2 現地で見たロヒンギャの暮らし

ロヒンギャ難民一人ひとりにはIDカードが付与されており、これを提示することで難民キャンプの内外を行き来することが可能となっている。これにより、難民は完全に隔離された存在ではなく、キャンプ外の社会や生活文化と日常的に接触する環境に置かれている。

国際機関やNGOから配給される支援物資は、しばしばキャンプ内外の闇市で取引されている。難民たちは、支援物資を売却して得た現金収入を用いて、必要な食料品や日用品を購入しており、自らの生活に必要なものを取捨選択している。

難民キャンプにおける建築物は仮設建築であることが前提とされており、恒久的な建築を建てることは原則として認められていない。そのため、国際機関やNGOから支給される住宅関連物資も、木材、竹、防水シート、トタンといった、撤去が容易な素材に限定されている。

3.3 ミャンマーにおけるロヒンギャの天井

同じミャンマーに住んでいたロヒンギャ同士でも、住んでいる地域によってその語りが微妙に異なる。ミャンマーに居住歴がある調査対象者7人の内、ミャンマーで天井布を使っていたと語った人は2人、使っていなかったと語

った人は5人と、どちらも存在した。また、天井布に関して難民自身の口から「Shamiana」と述べた者は一人もおらず、「Choppor : チョップボル」または「Soppor : ソップボル」というロヒンギャ固有の単語で呼んだ。

本研究ではChoppor(難民の語りが直接関係する箇所以外)とShamianaは同義ではないと位置づける。ロヒンギャの語りにおいてChopporという語は一貫して用いられているが、その指示内容も様ではなく、Shamianaのような天井布を指す場合もあれば、竹網代天井を指す場合もあることが明らかになった。

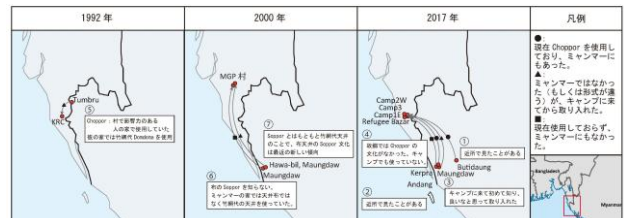


図5 ミャンマーにおけるChoppor使用状況年代別比較

3.4 ロヒンギャの天井布の基本情報

聞き取り調査からは、天井布の使用・非使用が様ではなく、それぞれの生活や住環境に応じて選択されていることが明らかになった。

天井布の入手方法として最も一般的なのは、キャンプ周辺の市場で布を購入するというものであった。購入した布はそのまま使用するのではなく、キャンプ内に住むロヒンギャの仕立屋や親族に依頼し、設置する部屋の大きさや用途に応じて縫製を依頼している。

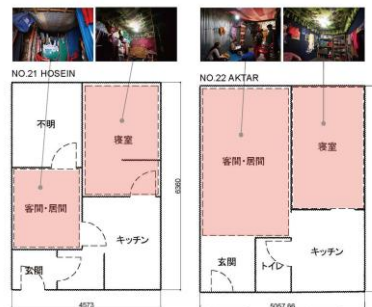


図6 内部空間と天井布の使い分け

ロヒンギャが天井布を使用する場面は、日常生活から婚礼、イスラム教の礼拝空間に至るまで多岐にわたっている。キャンプの住宅では、寝室と客間や居間に多く、寝室には婚礼の際に設置した天井布がそのまま用いられている。

天井布のデザインには、一定の傾向が見られる。市場で購入した布を用いて制作された天井布は、販売されている布の種類が豊富であるにもかかわらず、結果として多くの住居や店舗で似通った意匠が確認された。また、デザインの選択理由からは、天井布のデザインが特定の象徴的意味を担うというよりも、個人の好みやその場にふさわしいと感じられる雰囲気に基づいて選択されていることが明らかになった。

3.5 ロヒンギャが天井布を張る心理的要因

ロヒンギャ難民へのインタビューを通じて天井布の設置理由を尋ねると、その多くは装飾性、室温調節、埃の落下防止といった機能的側面に集約された。一方で、天井布は必ずしも不可欠な建築要素ではなく、布の選定から設置まで一連の行為が難民自身により主体的に行われている点が特徴的である。これらの特徴から、本研究では、天井布を張る行為が単なる機能性を超えて難民の帰属感和主体性を同時に発揮する建築実践であると解釈する。

3.6 小結

本章では、ロヒンギャ自身の語りと生活実践に着目した。ロヒンギャは固有の天井概念 Chopper を持ち、そこには天井布も含まれるが天井布だけを指す固有の語彙はない。移住前から天井布を使用していたという証言もあるが、キャンプでの製作過程からは伝統の踏襲の可能性が低く、むしろ現地化しているため外部のベンガル人観察者から Shamiana と認識されている。このようにロヒンギャが Chopper と認識してつくる天井がベンガル人から Shamiana と認識される現象を天井の Shamiana 化と呼ぶ。なぜこのような現象が起こっているのかを次章以降で明らかにする。

4. 地域文化としての Shamiana

4.1 全体の調査地域と各地域の名称の整理

全体で 4 つの県に当たる行政区画 (Dhaka, Tangail, Satkhira, Cox's Bazar) において調査を行った。各地域の調査を通して、バングラデシュ全土で Shamiana という言葉が使われているわけではなく、地域ごとに名称が異なっていることが分かった。

4.2 語りに見る Shamiana の役割

複数のインタビュー結果を総合すると、Shamiana が用いられる理由として、装飾性、室温調節、埃の落下防止といった機能的側面が共通して語られる。しかし同時に、一部のインタビューからは、こうした機能的説明だけでは捉えきれない文化的背景が示唆された。彼らの証言を踏まえ、Shamiana の使用は当初、社会的地位や宗教的象徴性、宗教的規範といった文化的役割を強く帯びていたが時代が下るにつれて後景化し、現在では機能的役割が前面に語られるようになった可能性が浮かび上がる。

4.3 宗教・民族による分類が孕む矛盾

調査結果を宗教や民族ごとに整理しようとする、いくつかの矛盾が生じる。同じ宗教・民族に属していても、居住する地域、すなわち村レベルの違いによって、Shamiana の呼称、入手方法、製作過程、使用場面に差異が見られるためである。したがって、Shamiana を村レベルの小さな地域文化として捉えることで、これらの差異と共通性をより適切に理解できると考える。

4.4 地域文化としての Shamiana と天井の Shamiana 化

キャンプの天井の Shamiana 化は、Shamiana の地域文化性と難民のモビリティによって引き起こされていると考える。難民は同じ市場の利用などにより、境界がありながらもホストコミュニティと生活文化を共有しており、キャンプの天井は市場の布やフリルの意匠が共通する点において、ホストコミュニティの Shamiana ときわめて近似している。結果として、ロヒンギャが自らの生活文化の延長として行う天井のしつらえは、周囲の地域文化が提供する

資源を取り込みながら再構築され、外部の観察者からは Shamiana と同一視される「天井の Shamiana 化」が起こっている。これは、難民キャンプとホストコミュニティの融合の表れである。



図 8 難民キャンプ (左) ホストコミュニティ (中央) 他地域 (右) の天井比較

4.5 小結

本章では、地域文化という視点に着目し、Shamiana がバングラデシュ全土で一様に共有された固定的な建築要素ではなく、村レベルの流通や慣習の差異に応じて、名称や用法が揺れ動くことを示した。そして、地域文化としての Shamiana が、難民キャンプという特殊な環境においてロヒンギャの天井と融合した結果、ロヒンギャの天井は外部の観察者から Shamiana と同一視される形態へと再編成され、天井の Shamiana 化が起こったことを明らかにした。次章では、これまでの知見を統合し、問いを総括する。

5. 終章

本研究で扱った天井の Shamiana 化は、ロヒンギャの天井である Chopper が難民キャンプ内外のモビリティと過密という特殊条件の下、地域文化の Shamiana と共通の素材を使用しながらロヒンギャの生活の中で再構築されることで生じた文化変容の過程であり、難民が住まいに主体的に関与する建築的な実践である。これが「ロヒンギャ難民キャンプで起こっている天井の Shamiana 化はどんな現象と言えるのか」という問いに対する結論である。本研究は難民キャンプにおける住環境を制度や支援の結果としてではなく、地域文化との関係性の中で再構築される建築的実践として捉えなおす枠組みを提示した点において、建築史と難民研究の双方に貢献するものである。

(脚注)

¹ Khan (2016) は、1556~1739 年の間、ムガル皇帝が軍事・娯楽目的の遠征に全体の約 40% の時間を割いていたことを指摘する。

(図版出典)

図 1) 館林市国際交流協会副会長柴田氏提供、図 2) 筆者作成、図 3) バドジャーナリズム出典、図 4) Joint Government of Bangladesh - UNHCR Camp Population and density map - as of June 2024 をもとに作成、図 5-7) 筆者作成、図 8) 林憲吾、筆者撮影

(主要参考文献)

1) 日下部 尚徳、石川 和雅編著。2019. ロヒンギャ問題とは何か—難民になれない難民。明石書店、2) 伊東 利勝編。2011. ミャンマー概説。めこん、3) 中西 嘉宏。2021. ロヒンギャ危機：民族浄化の真相、4) Suraiya Akhter. 2018. Movable Architecture of the Mughals and Its Continuity、5) Matluba Khan, Sheik Rana. 2023. Places-in-between: Rohingya refugee children's changing sense of belonging. *Crisis for Whom?*, pp. 138-146、6) Nisar Khan. 2016. "Tent Architecture of the Mughals". *Jamia Millia Islamia*. pp.2-4

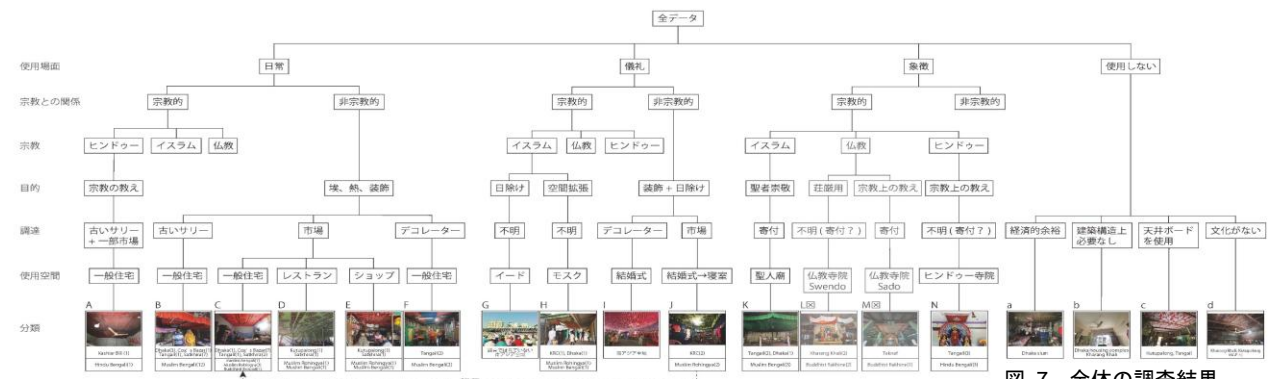


図 7 全体の調査結果